

## 小規模校における音楽教育の研究

日吉 武 [所属 鹿児島大学教育学部 (音楽専修)]

### A Study of Music Education for Small School

HIYOSHI Takeshi

#### 1. はじめに

筆者は、平成20年度、三大学（長崎大学、鹿児島大学、琉球大学）連携事業「三大学の連携による離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成」の一環として鹿児島県奄美大島と山形県鶴岡市への訪問調査を行った。またそれぞれの訪問校では合唱指導を行うことができた。

本研究はこれらの調査、指導に基づいた研究の成果をまとめ、小規模校における音楽教育について考察したものである。

#### 2. 小規模校における音楽教育の実際 —平成20年度の調査・指導より—

##### (1) 龍郷町立S小中学校の事例\*<sup>1</sup>

S小中学校には龍郷町音楽部会の指導助言者として訪問した。

音楽室で行われた研究授業の1時間目では、小学校5年生14名に対する歌唱指導の授業を参観した。児童は3分前行動というものに取り組んでおり、授業開始前に自主的に体操、発声、朗読を行っていた。また男性教諭のファルセットを使った歌唱指導やグループ別練習の活用など指導上の工夫が多く見られた。授業もテンポ良く進められ、最後には感動的な歌声に至るすばらしいものであった。

研究授業の2時間目は、筆者を含めた指導助言者2名が中学2年生9名に対し合唱指導を行った。指導は発声指導が中心となった。最初は緊張気味だった生徒も徐々にほぐれ、積極性が発揮された授業となった。姿勢を改善し頭声的発声の仕方を指導したところ、清音を伴った響きのある歌声に近づけることができた。

研究授業後には小中学生合同で組織されている合唱同好会に対し合唱指導を行った。ここでも発声指導が中心となったが、地声混じりの発声を頭声的発声に改善することができた。

本訪問後、S小中学校の音楽科担当教諭は、指導助言した歌唱・合唱指導の内容を授業の導入時5分間を使い継続指導している。指導内容は次に挙げるものである。

- ①発声器官に関係のある部位（肩・首・内転筋）のストレッチ。
- ②上半身を前に倒し天井に歌声を響かせる、頭声的な発声法につながる練習。

③目・眉・ほお等を引き上げて歌う、喉を開くことにつながる練習。

④発音・内容理解・表現の向上につながるための歌詞の朗読。

教諭の報告によれば、歌に自信が持てるようになったことで、家庭の中や登下校時に自然と歌を口ずさむようになった児童・生徒が増えてきたということである。

教諭が行った上記四つの指導内容の効果について、小3～中2の児童・生徒に尋ねたアンケートの結果を見ると、「あまり変わらない」という回答がほとんどの項目で0～2人と非常に少ないことが、まず目を引いた。(各学年の人数は一番多い小4が15人、一番少ない中2で9人である。)  
「目・眉・ほお等を引き上げて」という項目で中1の7人が「あまり変わらない」と回答しているのが唯一多い例であった。継続した指導によって子どもたちは自分たちの歌声に何らかの変化、改善を感じているということがわかる。

筆者を含めた指導助言者2名が特に関わった、発声に関わる指導(①～③)についてアンケート結果を見てみると、概ね次のような傾向が読み取れた。

まず発声の変化として多く挙げられているのは、ストレッチの場合は声が出しやすくなったこと、上半身を倒して行う練習の場合は高い声が出せるようになったことや響く声が出るようになったことであった。目・眉・ほお等を引き上げて歌うことについては、回答が分かれていたが、概ね小学生が声を出すのが楽になった、声が響くようになった、声量が増えた、高い声が出せるようになったと変化を多く回答していることが注目された。前述した中1の回答結果も合わせると中学生の場合、思春期の恥ずかしさから顔の表情を思い切り変化させる事への抵抗感がまだあるのかもしれない。我々が直接授業した中2では、声が響くようになったことと高い声が出せるようになったことが半数以上の生徒から効果として挙げられていた。

同教諭が行ったアンケート調査の質問「自分がこれまでと特に変わったと思うことがあれば書いてください」への回答の例を挙げると次のようになる。

- ・これまでよりも声が響くようになって歌に自信がもてるようになりました。たまに学校帰りに歌っています。(小3)
- ・響く声が出たり、高い声が出たりしやすくなったので、ほとんど毎日、登下校の時に歌を歌っています。(小4)
- ・前は声が前に出ているようなかんじだったけど、頭の上に響く声がかんじだんだん出てくるようになった。(小5)
- ・お風呂で歌っている。一人のときもすごく歌っている。歌がもっと好きになった。(小6)
- ・6年生の頃より、高い声が出しやすくなった。声が出せるようになった。息が続くようになったので思いっきり声が出せるようになった。(中1)
- ・前よりも合唱が好きになったと思う。声が出せるようになったから、みんなで歌うことが面白く、嫌じゃなくなった。(中2)

継続的な指導による技能向上の結果が、歌唱への関心・意欲・態度の高まりにつながっていることを示す記述である。

上述した報告は、教師が指導方法を獲得しそれを子どもたちに伝えることで、音楽技能の向上が図られ、その結果として音楽への関心・意欲・態度が高まるという、音楽教育が目指すべき成果がよく現れている事例と言えよう。

## (2) 奄美市立M小学校の事例<sup>\*2</sup>

M小学校は児童数28名の小規模校で、3、4年生と5、6年生が複式学級である。

M小学校の音楽教育の特徴の一つは、合同学習が有効に活用されているということである。

筆者は3～6年生、4学年合同の音楽授業を参観する機会を得た。異学年合同の形態は時々行われているということであったが、内容は歌唱指導が多いということである。

指導者は、それぞれの学年に応じたねらいや手立てが必要であることを踏まえつつも、異学年と一緒に学習することをメリットとして活かし、楽しく学習しながら技能を高めていく指導を目指しているということであった。

ではここでいうメリットとは何か。それは、小規模校であってもできるだけ多人数で構成する学びの場を生み出せるということであろう。M小学校の場合、各学年の学級編成は3、4年生が10名、5、6年生が9名という複式学級である。しかし両学級を合わせれば19名の児童による授業を行うことができるのである。これは音楽教育では特に有効なことである。歌唱活動、特に合唱活動などは人数を多くすればそれだけ充実した響きを味わうことが可能になるからである。10名よりは19名の響きの方がより合唱らしさを体験できることは言うまでもない。

また、上級生の学びの姿、成長の様子を、下級生に早くから見せることができる点もメリットの一つと言えるだろう。これは学年が離れているほど効果があがると考えられる。6年生と5年生は普段から同じ場で学んでいるのであまり感じないかもしれないが、3年生や4年生にとって6年生が頑張る姿やより成長している姿は、大いに刺激となるはずである。実際、参観した授業内でも6年生だけに歌唱させ、それを下級生が見、聴くことで、下級生の歌唱が良い方向に変化していく場面を何度となく観察することができた。あんな風に自分もなりたい、頑張りたい、という思いは、授業で最も大事な楽しさや充実感に必ずつながっていくものである。

M小学校における音楽教育の特徴のもう一つは、学校外の力を導入したり外部の音楽活動と連携したりすることを推進していることである。特に歌唱活動でさかんに行われているが、これは学校の経営方針にある「保護者や地域社会との連携を深め、その期待に応える『開かれた学校』づくりを推進する」という方針と、「心の教育」の重点事項の一つとしてうたわれている「花いっぱい歌声響く学校づくり」という目標に沿った教育活動として位置づけられる。

活動の具体的内容は、奄美を代表する歌手のCDに全校児童の合唱で録音参加したり、卒業

生である歌手（歌手として活躍中の先輩や奄美民謡大賞を受賞した先輩等）を招いて児童と交流していただいたりというものである。筆者が調査に行かせていただいたときも、奄美民謡の担い手である先輩が三線（沖縄・奄美で使われる弦楽器）や太鼓を指導するゲストティーチャーとして授業を行っている場面を参観することができた。

### (3) 鶴岡市立 I 小学校の事例<sup>\*3</sup>

I 小学校はへき地指定はされていないものの、全校児童12名という文字通りの小規模校である。

I 小学校の音楽教育の特徴の一つは、上述したM小学校と同じく合同学習が有効に活用されているということである。I 小学校では合同学習を全校児童全員で実施しており、これを「全校授業」と呼んで教育研究の柱の一つとしている。

学校側の説明によれば、全校授業は平成18年度、まず体育で始めたということであった。その後には算数、音楽、国語、図工へと広げていっているということである。

全校授業創設の理由は次の二点である。

- 各教室の児童数が少ないので、子どもたちの成長にとっても大事なこととして、多くの児童と「かかわる」授業が必要であると考えた。
- 同じ目的の授業なら一緒にやった方が効率的である。

特にこの学校の教育の重要なキーワードとして、理由の一つ目にある「かかわる」ということを力説しておられた。実際、学校側では全校授業の効果として、意欲・関心の高まりとともに、関わる場面が増えたことで子どもたちの（仲間や教師と）関わる力が伸びているということを挙げている。筆者は調査の時、全校国語の授業を参観したが、確かに児童も教師も心を開き活発且つ楽しそうに活動する様子を観察できた。児童の自主的な学習が行われつつ、仲間や教師と積極的に関わり、よく協力して学習を進めていく姿が見られるすばらしい授業であった。

また国語参観の後、引き続き行われた全校音楽における歌唱指導では、筆者は子どもたちの歌声が清音を伴いきれいであることに加えて、歌い方や声質が1年生から6年生までよくそろっていることに驚かされた。「かかわる」ことを大事にした全校単位の学習指導が、音楽の学習内容の共有や定着にもつながっていると考えられる場面であった。

全校音楽は、平成20年度の全校授業の中で最も多い、年間15回行われていた。内容は合奏を題材にしたもので、打楽器やリコーダー中心ということであるが、金管楽器を加える時間もあるということであった。またリコーダーは発表会を含めて5時間取り組み、1年生から持たせているということであった。<sup>\*4</sup>

合奏は人数がいた方が音楽的効果も多彩になり、また楽しさも増すので、全校授業の効果が当然あがる学習活動とすることができる。

#### (4) 鶴岡市立F小学校の事例\*<sup>5</sup>

F小学校は山間部にある学校だが、学区が広いこともあり、複式学級は3、4年生の一学級のみという、へき地としては比較的児童数の多い学校である。

F小学校の音楽教育におけるすばらしい点は、学校経営の中に音楽教育への取り組みが重要な戦略の一つとして明文化されていることである。学校教育目標『一人一人の子どもに「勢い・潤い・磨き合い」を実現します』のもとにかかげられているスローガン「響き合い&笑顔&感動」を実現するための戦略の中に、「音楽の日常化と感性の育成」という一文が明確に位置づけられている。そして、この戦略のもと毎朝会で全校児童が歌唱活動し、指導者が歌唱・合唱指導を行うことを展開しているということであった。

このような音楽教育を重視する姿勢が成果をあげていることは、6年生への音楽指導でも十分に感じる事ができた。

筆者は6年生全10名に出前授業として合唱指導を行ったが、導入時に聴いた児童たちの歌声の良さは大変すばらしいものであった。それは、高音部はもちろんのこと低音部までファルセットの質を中心とした清音が追求された歌声であった。

また、その歌声の土台にある音楽学習への姿勢も、意欲と協力性にあふれたすばらしいものであった。それは教師の指導の質の高さもさることながら、学校教育の柱の一つとして音楽教育が重視され、児童の中に学びとして定着していることの見事な証であると筆者は捉えている。

出前授業では発声の方法を中心に指導したが、上述したような関心・意欲・態度と技能、両面における基礎的なレベルの高さがあるので、児童は指導内容をすぐに実行し目に見える上達をしていった。指導内容の例を挙げると次のようになる。\*<sup>6</sup>

- ・息を鼻から多く吸うこと。
- ・口の中を大きく開いて歌うこと。(軟口蓋をあげる努力をすること。)
- ・体を大きく感じて歌うこと。(トトロのように。首はメタボリックシンドロームかのように太く感じて。頭はアンパンマンのように等。)
- ・目をよくあけて歌うこと。(プリキュアファイブやおじゃる丸の目のように。)
- ・頭の上の方に声を出していくこと。(ミッキーマウスの声のように。)

また、少人数授業であることを生かし、軟口蓋の開いた様子を一人ずつに見せてあげたり、一人一人に姿勢を指導したりする等、個別指導の場面を作るよう心がけた。

授業の結果、より頭声的な響きに磨きがかかった。加えて合唱の響きづくりでは、広がり、ボリューム感を増す効果が大いに見られた。全体として子どもたち、指導者、そして学校長以下参観者の誰もが、上達を実感できる出前授業となった。

授業直後に書かれた児童の感想から代表的なものを挙げる。

- ・声を出す時に口から息を吸っていたけど、「鼻から吸ったほうがいいよ」と教えてくださったので、少し歌いやすくなりました。あと、体はトトロで首メタボ、目はプリキュアというのがとてもおもしろかったし、とても楽しかったです。ピアノに向かって声を出したら、響いていたので良かったです。とても楽しい授業、ありがとうございました。卒業式の時もがんばって歌います。
- ・今日は声のきれいな歌い方やせいなどいろいろなことを教えて下さってありがとうございました。日吉先生の声はすごくきれいで音楽室全体にひびいていたのですごいなと思いました。またおじやる丸の目やトトロの体をいかして歌うと、いつもよりもひびきが良くなって、きれいに歌えたので良かったです。でも息は口から吸って歌うと思っていたけど、本当は息は鼻から吸って歌うということが初めてわかりました。少し難しい言葉が出てきてわからなかったところもあったけど前よりきれいに歌えたので良かったです。
- ・今日は音楽授業で色々教えてくれてありがとうございました。おかげで歌がうまくなったと思います。また、色々なものに例えて教えてくれたのでとてもわかりやすかったし、とってもおもしろかったです。次の練習からは体はトトロ、首はメタボ、目はおじやる丸、頭はアンパンマンになったつもりでがんばっていきたいです。(笑) 今日とってもいい経験になりました。機会があったらまた来てください。中学でお待ちしています。

指導内容に関心を寄せ、楽しんで授業を受けられた様子、また合唱の変化を実感できた様子を捉えることができる感想である。

F小学校での出前授業の結果から得られる示唆は次の点であろう。

- 関心・意欲が高く、あわせて音楽の基礎的な内容が身に付いている子どもたちであれば、出前授業のような短時間の指導でも効果は大きく現れ、子どもたちの満足度も高い、充実した学習活動になる。
- 子どもたちに親しみやすいキャラクター等をたとえに使った指導は、子どもたちの中に授業が楽しい、わかりやすいという気持ちを生み出し、より関心・意欲を高めるとともに、これからもっと頑張っていこうという前向きな姿勢を生じさせている。
- 普段と違う指導者（いわゆるゲストティーチャー）から違った教え方や内容を学ぶことは子どもたちにとってよい刺激となっており、それだけ学んだ内容が印象深いものとなっている。

### 3. 小規模校における音楽教育について

前項では平成20度の調査と指導から四つの学校を事例として取り上げたが、そこからは、これからの小規模校における音楽教育の在り方に対する有効な示唆として、次の四点を得ることができる。

- ①教師の指導の工夫や指導力向上のための研修機会の充実が必要であること

指導の工夫は、当然のことながらほとんどの現場教師が日々取り組んでいることである。しかし、その工夫内容が専門的な知見に照らして正しいものなのか、その工夫を続けていってもよいものなのか、ということに自信を持っていない音楽教師は多い。

教師の指導上の工夫点を専門的知見を持った指導助言者同席のもとで検討する研修会は、現場教師に自信を与え、確信を持った指導内容の継続的な指導につながっていくものである。そして、そのような自信と確信を持った指導が子どもたちの力を伸ばしていくということは、S小中学校の事例を見ても明らかである。

教師の指導力向上が不可欠なこともまた明白であり、本稿で触れた以外にも、筆者が研修会や出前授業の指導者として小規模校に訪問したことは少なからずある。しかし、そのほとんどは一回のいわゆる勉強会に終わっているのが現状である。S小中学校の事例のように、その後の指導経過について報告を受けたり、指導内容について指導助言者とやりとりを続けたりすることが、研修会の効果をさらに高めることにつながる。研修機会の充実とともに、継続した研修システムの構築が課題として挙げられる。

## ②合同学習の設定が有効であること

この点は、本研究の過程で得られた最も有効な示唆である。奄美のM小、鶴岡のI小、F小の事例からも明らかのように、異学年合同の学習は、多人数で活動できるという点、上級生から下級生までそれぞれが刺激し合い学び合えるという点において音楽教育では特に有効である。合唱や合奏だけでなく、創作や鑑賞も含めて活用できる可能性は大いにあると言ってよい。

頭声の発声の技能に代表されるように、音楽には普遍的に大事にすべき要素、身に付けるべき技能がある。その指導には学年差は関係ないのであり、その点においても合同学習は有効な指導の場ということができる。新学習指導要領に新しく取り入れられた「共通事項」も、合同学習を検討する上での軸とすることができるだろう。

ただし少人数であることは、一方では個別指導のよい機会であるということも言える。教師が子どもたちとの人間関係を構築し、指導力を高め発揮すれば、個別指導ほど子どもの力を伸ばすものはない。個別指導を含めた少人数による音楽教育と合同学習の併用が肝要である。

## ③外部講師やゲストティーチャー等の学校外部の指導力の活用が有効であること

地域で行われる音楽活動（演奏会やCD収録等）に積極的に参加していくことは、成就感を得させることができ児童・生徒の音楽能力の伸長、特に関心・意欲・態度の高まりにつながる。

また音楽の分野で活躍している外部講師（先輩等）を積極的に招き子どもたちと交流していただくことも、音楽活動の活性化を図るのに有効である。さらに外部講師の導入は、子どもたちにとっても現場教師にとっても新しい技能や指導・練習方法と出会う重要な機会となる。このことは、本研究に絡んで行った出前教室の結果でも明らかである。

## ④学校経営の方策の中に音楽教育を位置づけることが有効であること

学校経営の方策の中に明文化して音楽を取り入れ、学校教育全体の柱の一つとして活かしていくことは、音楽教育の充実と子どもたちの音楽能力の伸長に有効であるとともに、さらには学校全体の教育活動の充実にもつながっていく。このことはM小学校やF小学校の事例が重要な示唆となっている。音楽が授業内だけでなく行事等の場面で活用されることは当然前のように存在する。また伝統として音楽活動に熱心に取り組んでいるという学校も少なくない。しかし、学校全体の経営レベルではっきりと目標に掲げている例は多くはないであろう。今後、大いに着目されるべきである。

#### 4. おわりに

小規模校の音楽は普通規模の学校に比べると合唱や合奏でなくアンサンブルになってしまう、活動内での意見交換がどうしても少なくなってしまう等の“問題点”があると考えている教師は多い。またそれ故、普通規模の学校でできる音楽活動が“できない”とあきらめの気持ちを持っている教師も少なくないと聞く。

しかし、上述してきた4つの学校の音楽教育の取り組みには、そのような教師のマイナス思考をプラスに変える方向性を見出すことができた。事例にも見られたように音楽教育は学校教育の子どもたちの成長にとって欠かせないものであり、重要な柱になり得るものなのである。今後も研修会等で現場の先生方に指導等を提供しながら、ともに学び考え、小規模校の音楽教育のあり方について研究を続けていきたいと考えている。

なお本稿の執筆に当たって龍郷町立S小中学校の新福一孝教諭には、調査資料のご提供をいただいた。深く感謝の意を表するものである。

#### 【注】

- \* 1 龍郷町立S小中学校へは平成20年7月8日、「龍郷町音楽部会研修会」の指導助言者として齊藤祐教授（鹿児島大学教育学部音楽専修）とともに訪問した。
- \* 2 奄美市立M小学校へは平成20年7月9日に調査で、また平成20年10月8日に「奄美市音楽部会研修会」の指導助言者として齊藤祐教授とともに訪問した。
- \* 3 鶴岡市立I小学校へは平成21年2月17日に安井孜教授（鹿児島大学教育学部数学専修）、齊藤祐教授とともに訪問、齊藤教授とともに出前授業を提供した。
- \* 4 リコーダーの学習は小学校3年生から始めるのが一般的である。
- \* 5 鶴岡市立F小学校へは平成21年2月18日に安井孜教授とともに訪問、筆者は出前授業を提供した。
- \* 6 初等科音楽教育における発声指導については、拙論「初等教育教員養成課程における発声指導の一試案」（鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第17巻）を参照されたい。